

令和5年産 あきさかり栽培のしおり

J A香川県仲多度地区営農センター
香川県中讃農業改良普及センター監修

生育特性に合わせた栽培管理を行い、高位安定化生産に取り組み、安全で安心な売れる米を作りましょう！

○ 環境への配慮

- ① 稲わら、麦わら等は焼かずすき込み、堆きゅう肥等の施用により土づくりに努めましょう。
- ② 農薬散布の際は、周辺環境に被害を及ぼすことがないように飛散防止対策を講じましょう。

○ 品質・食味の向上

- ① 近年、平均気温が上昇していますので、播種、田植時期は生育管理の目安に準じて行いましょう。
- ② 地力に応じた施肥に努め、特に穂肥は草姿、葉色、品種特性に合わせた適期、適量の施肥を行いましょう。
- ③ 生育期間を通じて間断灌水を行い、適正な水管理に努めましょう。
- ④ 必須防除の徹底と病害虫の発生に応じて確認防除を実施しましょう。
- ⑤ 収穫前には異品種の混入を回避するため、コンバイン、乾燥機等の清掃を徹底しましょう。
- ⑥ 品質食味を落とさないよう籾黄変率8.5%程度の時に収穫し、収穫後3時間以内に乾燥作業を行いましょう。

○ JA香川米への取り組み

消費者から信頼され、売れる米づくりのため、下記の要件を満たしたJA香川米の生産に取り組みましょう。

- ① 銘柄が確認された種子（毎年、種子更新100%）により生産・出荷されたお米
- ② 栽培基準が守られている事が栽培履歴書により確認されたお米（収穫15日前までに各支店、出張所へ栽培履歴書を提出して下さい。）
- ③ JA香川県で農産物検査を受けたお米

「あきさかり」の特徴と栽培上の留意点

- ① 短稈で耐倒伏性は強い。
- ② 高温登熟条件下で白未熟粒が発生しやすい。
- ③ 収量性は高く、極良食味。
- ④ いもち病、紋枯病にやや弱い。

※ 適正な肥培管理、防除が必要です!!

近年農作業中の事故・トラブル等が多発していますので、安全面・周囲の環境に配慮した農作業を心掛けましょう。

病害虫の発生状況については最新の香川県病害虫防除所のホームページをご覧ください。



病害虫防除所HP

1. 生育・管理の目安

生育相	活着時期	茎が増える時期	茎の増加を抑える時期	穂ができる時期	穂が大きくなる時期	穂に実が入る時期																
作業の目安	作業	田植日	間断灌水開始 (田植後2週間)	田干し開始 (亀裂幅約1cmまで)	間断灌水開始 (出穂25日前)	穂肥施用 (出穂18日前)	出穂期	収穫期														
	管理の目安	6月5日	6月19日	6月30日	7月13日	7月20日	8月7日	9月11日~9月15日														
		6月10日	6月24日	7月5日	7月16日	7月23日	8月10日	9月15日~9月19日														
		6月15日	6月29日	7月10日	7月19日	7月26日	8月13日	9月19日~9月23日														
	6月20日	7月4日	7月15日	7月22日	7月29日	8月16日	9月21日~9月25日															
水管理	深水 7cm	浅水 3cm	間断灌水	田干し	間断灌水	灌水	穂水 (実入りを良くする)	間断灌水														
栽培管理のポイント	基肥	土壌改良資材	箱処理剤施用	田植	初期除草剤散布	田(ガス抜き)	間断灌水開始	中期除草剤散布	田干し	病害虫防除	間断灌水開始	紋枯病防除	穂肥	出穂期防除	畦畔雑草刈取り	出穂前後水管理	カメムシ防除	間断灌水開始	落水	収穫	乾燥	籾摺・調製
	○ユークシケイカル 苦土一番等 施用しない。	○必須防除	○株間は20~22cmとし、 植付深さは、2~3cmとする。	○十分に水深を確保する。 散布後7日間は止水する。	○ワキ現象が見られたら落水し、 2~3日、軽く田干しする。	○分けつ促進のため、浅水とし、 常に水を湛めない。	○使用基準を厳守する。	○地割れは1cm程度までとする。	○草数が20本程度確保できれば 田干しを開始する。	○極端な田干しはしない。	○確認防除	○徐々に水の量を増やす。	○紋枯病にやや弱いため、発病を 確認して防除する。	○生育、葉色に合った量を施用する。 過剰生育のほ地では減肥する。	○必須防除(本田一回目)	○斑点米カメムシの発生を抑えるため 出穂10日前までに畦畔雑草を刈取る	○穂肥時期(出穂後14日間は 最も水分が必要な時期のため、 湛水管理とする)	○必須防除(本田二回目)	○水入れの間隔を徐々に広げる。	○落水は収穫作業に支障のない 時期まで遅らせる。	○籾の85~90%が黄変した時期が 刈り取り適期。	○過乾燥を避け、玄米水分を 14.5~15%に上げる。

2. 施肥基準(基肥は、側条施肥における施用量を記載)

1) 基肥+穂肥タイプの施肥基準

肥料名	全量	基肥 (側条施肥)	穂肥 I (出穂18日前)	成分(N-P-K)
コシツタッチ	75	40	35	10-10-10

2) 基肥一発タイプの施肥基準

肥料名	全量	基肥 (側条施肥)	成分(N-P-K)
あきさかり一発	40	40	18-10-14

3) 土壌改良資材

資材名	全量(基肥)
ユークシケイカル	100
苦土一番	40
けい酸加里	30~40

本田施肥上の注意事項

- ① 基肥は地力、前作物の状態によって、穂肥は生育や気象状況によって、加減して過剰施肥を避ける。
- ② 土づくりのため、荒起し時にユークシケイカルまたは苦土一番を施用する。
- ③ 基肥一発タイプの肥料を使用する場合は原則、穂肥は施用しない。
- ④ 苦土一番、けい酸加里は、基肥、追肥(出穂30~40日前)いずれの施用でも良い。
- ⑤ 側条施肥でない手散布等の場合は、基肥量を1割程度増肥する。
- ⑥ 水田では、肥料成分溶出後の被膜が浮上することがありますので、被覆膜をほ場外へ流出させないように注意する。

3. 雑草防除基準(令和5年産水稲栽培のしおり参照)

区分	防除時期	主な対象雑草名	除草剤名	使用量・回数	注意事項
初期除草	移植後~9日		イネキングフロアブル	500ml/10a 1回 (移植後30日までに使用)	○湛水して畦畔から本田に入って原液のまま容器を振って散布する。 ○散布後3~4日間は水深3~5cmを保つ。 ○砂質土壌、漏水田、極端な浅植、軟弱苗では使用しない。 ※1
	移植後~7日	水田一年生雑草、マツバイ、ホタルイ、ウリカワ、ミズガヤツリ	カチボシLジャンボ	小包装(パック)10個(300g)/10a 1回 (移植後30日までに使用)	○散布直前から3~4日間は水深5~6cmの湛水を保つ。 ○湛水して畦畔から小包装のまま10aあたり10個の割合で均等に投げ入れる。 ○深や浮草が発生している水田では、拡散が不十分となり、葉害の発生や効果が劣る可能性があるため、使用しない。 ※1 ※2
	移植時(田植同時散布)又は移植後~9日		キクトモ1キロ粒剤	1kg/10a 1回 (移植後30日までに使用)	○葉類が繁茂した後の散布では効果が劣りますので、発生始めまでに散布する。 ○散布後3~4日間は湛水状態を保つ。 ○湛水して手まき又は散粒機等で均一に散布する。 ○砂質土壌、漏水田では使用しない。 ※1
中期除草	移植後7日以降	ノビエ、アゼガヤ、キシウスズメノヒエ	クリンチャー1キロ粒剤	1kg/10a 2回以内 (収穫30日前までに使用)	○広葉雑草の多発田では使用を避ける。 ○散布後3~4日間は湛水状態(3~5cm)を保つ。 ○ノビエ3葉期までの使用とする。
	移植後20日以降	ノビエ、キシウスズメノヒエ、ホタルイ、ウリカワ、広葉一年生雑草	クリンチャーバスME液剤	1000ml/10a 2回以内 (収穫50日前までに使用)	○落水又は浅く湛水した状態で、70~100ℓの水に溶き、噴霧器等で散布する。 ○湛水状態で散布し、3日間はそれ以上の落水・入水等はしない。落水ができない場合は浅水状態で散布し、5日間は落水・入水等はしない。
	移植後20日以降	広葉一年生雑草、ホタルイ、ウリカワ、オモダカ	バサグラン粒剤	3~4kg/10a 1回 (収穫60日前までに使用)	○落水又はごく浅く湛水して手まき又は散粒機等で均一に散布する。 ○落水直後処理とし、散布後2~3日間入水しない。
	移植後14日以降(早期20日以降)	水田一年生雑草及びマツバイ、ホタルイ、オモダカ	セカンドショットSジャンボMX	小包装(パック)20個(500g)/10a 1回 (収穫45日前までに使用)	○散布直前から3~4日間は水深5~6cmの湛水を保つ。 ○湛水して畦畔から小包装のまま10aあたり20個の割合で均等に投げ入れる。 ○深や浮草が発生している水田では、拡散が不十分となり、葉害の発生や効果が劣る可能性があるため、使用しない。 ○ノビエ3葉期までの使用とする。 ※2

※1. 砂地で葉害がやすい地域やスクミリンゴイが多発しているため湛水できない場合は、田植後5日以降に除草剤を使用する。
※2. ジャンボ剤のバックのフィルムは水溶性なので濡れた手で作業したり、降雨で破損することのないように注意する。

4. 病害虫防除基準

1) 必須防除

対象病害虫	農薬名	消毒時間	使用基準	注意事項
いもち病、こまね病、紋枯病、いもち病、こまね病	テクトロドCフロアブル	24時間	200倍 (50ml/水10ℓ) 1000倍 (10ml/水10ℓ)	浸種前/1回 ○混合液10ℓに対し種籾5kgの割合とする。 ○葉液の温度は15℃以下にならないようにする。 ○残液は河川、用水路、ため池に捨てない。
心枯病	スミチオン乳剤			
2. 播種時の防除				
対象病害虫	農薬名	使用基準	使用基準	注意事項
苗立枯病	タチガレエースM液剤	500~1000倍 (20~10ml/水10ℓ)	播種時又は発芽後/1回	○1箱当たり500mlを湛注する。 ○培土が砂壤土の場合は葉害が発生する恐れがあるのでダコレート水和剤を使用する。
	ダコレート水和剤	600倍 (17g/水10ℓ)	播種時~緑化期/2回以内	○1箱当たり500mlを湛注する。 ○播種14日後までに使用する。
3. 苗箱防除				
防除時期	対象病害虫	農薬名	使用基準	注意事項
田植当日	中葉いもち病、こまね病、イネシロアザミ、ツマグロヨコバイ	Dr.オリゼスターク箱粒剤	50g/箱 1回	○老化苗、軟弱徒長苗、露のある場合には葉害のおそれがあるので注意する。 ○本田には直接散布しない。 ○育苗防除は、本田防除と体系処理で使用する。
	平野地いもち病、こまね病、イネシロアザミ、ツマグロヨコバイ	ビルダフェルテラチスGT粒剤	50g/箱 1回	

※「水稲育苗のしおり」を参考に施用する。

4. 本田防除

防除時期	対象病害虫	農薬名	使用基準	注意事項
(一) 出穂 20~15日前	いもち病、紋枯病、稲こし病、ウツカ類、カメムシ類、ツマグロヨコバイ	ゴウケツモンスター粒剤	3kg/10a 収穫45日前まで1回	○水深3cm程度まで水をためて均一に散布し、散布後7日間は落水、かけ流しを行わない。
(二) 出穂直前	いもち病、紋枯病、稲こし病、ウツカ類、カメムシ類、ツマグロヨコバイ	ダブルカットバリダフロアブル ※	1,000倍 穂揃りまで2回以内	○殺菌剤・殺虫剤の混合で使用 ○株元、葉鞘部に対して散布むらがないよう全体に均一に散布する。
(三) 出穂後 10~20日後	カメムシ類、ウツカ類	スタークル粒剤(粉剤DL)	3kg/10a 収穫7日前まで3回以内	○粒剤を使用する場合は、湛水状態で均一に散布する。
		スタークル顆粒水溶液	2,000倍 収穫7日前まで3回以内	○スタークルは混合剤を含めて、3回までの使用とする。
		スタークル豆つぶ	250g/10a 収穫7日前まで3回以内	○ミツバチに影響があるので、養蜂がある場合は、飛散しないように注意する。

※出穂前にダブルカットバリダフロアブルとスタークル顆粒水溶液の混用散布を行う。

2) 確認防除

対象病害虫	農薬名	使用量	使用基準	注意事項
スクミリンゴイ(ジャンボトナシ)	スクミノン	1~4kg/10a	移植後(収穫60日前まで) 2回以内	○湛水状態で散布し、散布後7日間は湛水状態にして、落水かけ流しを行わない。 ○水田以外には絶対に使用しない。 ○被害が多発する場合は、田植後当日に使用する。
ニカメイチュウ・イネツトムシ・コブノメイガ・アザミウメ類	バダン粒剤4	3~4kg/10a	収穫30日前まで 6回以内	○3cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後7日間は落水・かけ流しを行わない。
ウツカ類、コブノメイガ・カメムシ類	トレボンEW	1000倍 (100ml/水100ℓ)	収穫14日前まで 3回以内	○株元、葉鞘部に対して散布むらがないよう均一に散布する。
いもち病・紋枯病・ウツカ類・カメムシ類	ワイドパンチ豆つぶ	250g/10a	収穫35日前まで 1回以内	○3cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後7日間は落水・かけ流しを行わない。
いもち病	ブラシンプフロアブル	1000倍 (100ml/水100ℓ)	収穫7日前まで 2回以内	○粒剤・フロアブルは株全体に均一にかかるとよい、ていねいに散布する。
	ブラシンプ粉剤DL	3~4kg/10a	収穫7日前まで 2回以内	○粒剤・フロアブルは周囲の作物や環境に十分配慮し、飛散しないよう風が無い時に散布する。
紋枯病	リンパー粒剤	3~4kg/10a	収穫30日前まで 2回以内	○粒剤は株全体に均一にかかるとよい、ていねいに散布する。
	バリダシン液剤5	1000倍 (100ml/水100ℓ)	収穫14日前まで 5回以内	○出穂後にまん延の兆しが見え、散布の必要を認めた場合はバリダシンを遅くとも出穂10日後までに散布する。

注)スクミリンゴイの発生拡大を防ぐため、客土・農機具の移動の際には注意する。

※農薬・除草剤には2022年9月1日現在の登録状況による 2022年10月作成